

原爆音楽の軌跡

第1期（1945～51）

被爆直後から1951年までを第1期とする。何故なら52年に対日講和条約が発効して、日本は一応独立することになり、政治的に一つの節目を迎えるからである。それまでの占領期間中、プレスコードの名の下に、アメリカ占領軍は原爆の被害を日本国民にできるだけ知らせないように努めたと言われている。「原爆」は禁句だったとも言われている。したがって、音を介する表現分野にも大きな拘束力を持ったであろうことは想像に難くない。そのような中、1945年の11月に、長崎で被爆した木野普見雄が、早くも〈独り息づく〉という歌曲を作曲している。この曲が、今のところ広島と長崎を通して初めての原爆音楽といえるだろう。木野氏はその後も精力的に長崎をテーマにした曲を15曲ほど作曲している。

翌46年からは、広島市や地元の報道機関などが中心となって、いち早く復興や平和をテーマにした歌詞の募集を始めている。広島市は当選者2人（藤井啓市、吉井清雄）による「復興の歌」の作曲を専門家（紙恭輔、渡邊弥蔵）に依頼し、市民の意欲高揚に努めている。地元の中国新聞社が被爆1周年を記念して募集した「歌謡ひろしま」は、復興の意欲に燃える老若男女の市民に愛唱されることを願って、8月9日付の同紙に楽譜付きで発表された（山本紀代子作詞、古関裕而作曲）。また、中国新聞社と日本文化平和協会の主催による「平和の歌」懸賞募集には、全国各地から一万二千通余りの応募があり、一等入選作「空はばら色明け渡る」（丸山静作詞）が、48年8月、「平和の歌発表音楽会」で華やかに披露されている。49年には、広島県教育委員会も、「広島復興音頭」を選定している。これらの歌が当時どれだけ人びとの間で歌われたかは定かではないが、音楽が窮地にあえぐ市民の心を少なからず潤し、力づけたことには間違いないだろう。

一方、被爆翌年の夏には、供養盆踊り大会や英豪軍軍楽隊による激励と慰安の演奏会など開かれているが、47年からは8月6日に平和祭の式典が挙行されている。47年には広島平和祭協会が設立され、同協会が公募した「平和の歌」の歌詞の中から重園賢雄の入選が決まり、その作曲を山本秀が担当した。（平和の歌）は同年の平和祭式典の中で市内男女生徒により合唱されたが、その後今日に至るまで、広島を代表する歌として人々の間に広く歌い継がれている。48年の式典では〈ヒロシマの歌〉（大木惇夫作詞、乗松昭博作曲）が発表され、49年には、〈ヒロシマに寄する歌〉（エドモンド・ブランデン作詞、寿岳文章訳、山田耕笹作曲）と、〈広島平和都市の歌〉（大木惇夫作詞、山田耕笹作曲）がいずれも発表された。これらの歌は、広島平和祭協会が主催する「平和音楽会」でも演奏されている。焦土と化した広島で音楽が早くも産声をあげた背景には、当時の浜井信三広島市長の並々ならぬ努力があったことは余り知られていない。浜井市長は、48年の平和祭では騒々しい行事は一切取りやめ、文化に恵まれない市民への贈り物として、音楽会と美術展の2本に絞って行事を企画したという。これらの活動が刺激となって、次第に広島の地に文化活動が根づいていくことになる。

この第1期の6年間には、約20曲余りの原爆音楽が個人の手によって書かれているが、中でも作曲家として名高い山田耕笹が広島に想いをよせ、5曲も作品を残しているのが注目される。その中の一曲〈原子爆弾に寄せる譜〉は、早くも46年に作曲され、地元の葉室潔によりパレエに振付け発表された。

原爆が日本を代表する音楽家、山田耕笹の心を捉えたものは何であったのか。『山田耕笹全集』を紐解いてみると、楽譜の合間に同氏のエッセイが挿入され、それらの作品の創作動機を知ることができる。（注2）

「終戦の秋の暮れであった。私は中国から九州一円にわたる演奏の旅を続けた。その時、私は原爆に壊滅した二つの町をみた。それは地獄の絵図そのままの身の毛もよだつ風景であった。その強烈きわまる印象に激しくも撃たれた私は何とも言い表し得ぬ気に圧されて、3年の歳月をただ無為に過ごして来たのである。しかし私の胸に蒔かれた感銘の種は、知らぬ間に新しい創作の芽生えとなって私の心に蘇生した。（以下略）」

46年6月27日付の中国新聞紙上には、「楽譜に躍る悪夢の再現」という見出しで、〈原子爆弾に寄せる譜〉を作曲した経緯が紹介されている。「いたましい犠牲者の音楽法要をするとともに、世界的文化都市として復興にあたって市民に対する激励もしたい。」という同氏の想いは、心あたたまる贈り物として広島市民の心に届いたに違いない。同じような想いは、詩人西条八十の胸中をも動かしたようで、51年2月9日付の同紙上には、広島の歌を作詞するため広島を訪れた同氏の意気込みが報じられている。

この時期には、ほかに合唱曲〈遠き民の〉（原民喜作詞、団伊玖磨作曲）、交響詩〈ひろしま〉（木下夕爾作詞、宮

原禎次作曲)、などがあるが、いずれも悲惨な原爆体験を訴えるものである。後者の演奏を担当したのは広島放送管弦楽団であるが、広島放送合唱団とともに、地元のNHK広島中央放送局が果たした役割はきわめて大きい。

参考文献

- ・ 原爆被災資料広島研究会『原爆被災資料総目録』第二集 原爆被災資料広島研究会 1960年
- ・ 中国新聞社編『年表 ヒロシマ～核時代五十年の記録～』メディア開発局出版部 1995年
- ・ 『中国新聞項目別記事索引』昭和49年7月～平成10年7月 中国新聞社

(原田宏司・広島大学名誉教授)